

金融経済概観

金融市場動向

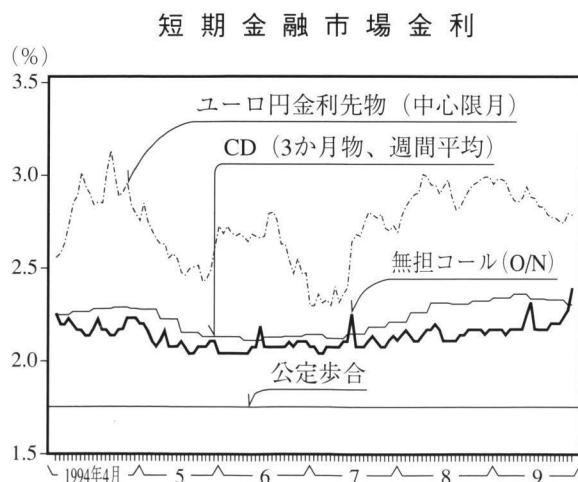
—平成6年9月—

(平成6年10月17日)

1. 短期金融市場

9月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、月末にかけてやや上昇した。一方、CD（譲渡性預金）3か月物レートは、下旬にかけて弱含んだ。ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、幾分低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は38兆8,943億円と、前月（40兆2,505億円）比減少した。

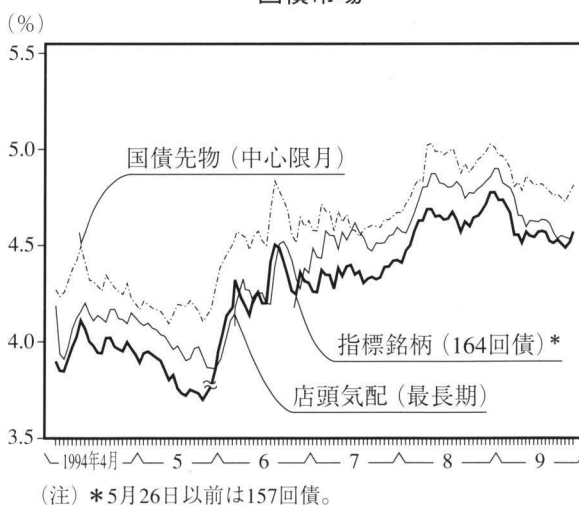


2. 資本市場

9月の長期国債利回り（164回債）は、前月の急ピッチな上昇に対する反動もあって上

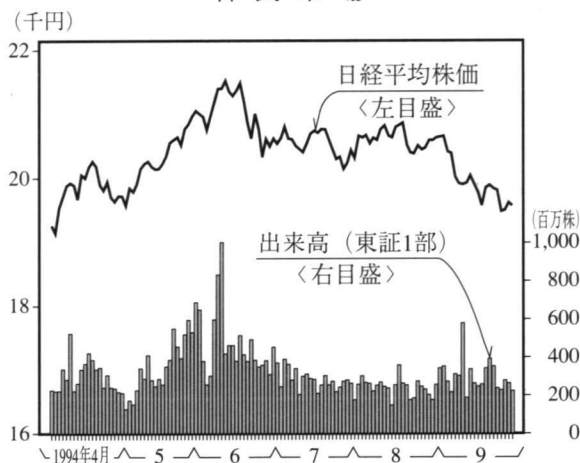
旬中に低下した後、概ね横這いで推移し、結局4.560%で越月した（前月末4.775%、国債先物中心限月利回りは4.812%＜前月末5.009%＞で越月）。国債の出来高は、現物（店頭取引）、先物ともに前月を下回った。

既発債市場利回り
—国債市場—



株式市況（日経平均株価）は、薄商いの中、法人の中間決算を眺めた売却等もあって軟化し、結局19,563円で越月した（前月末20,628円）。また、株式出来高（東証1部月中1営業日平均）は3.01億株（速報）と、前月（2.43億株）を上回った。

株式市場



起債動向をみると、長期国債10年物（価格競争入札分）については、総じて低調な入札となった（9月27日入札分＜10月債＞は募入平均利回り4.505%、応募倍率2.16倍）。一方、超長期国債20年物は、クーポンレートが5.0%に引き上げられたこともあって、総じて順調な入札となった（9月8日入札分は募入平均利回り5.008%、応募倍率2.29倍）。また、中期国債2年物については、低調な入札となった（9月13日入札分は募入平均利回り2.550%、応募倍率1.55倍）。短期国債については、6か月物は短期金利先高観の強まり等から低調な入札となった（9月7日入札分は募入平均利回り2.408%、応募倍率1.39倍）ものの、3か月物は現先玉確保の動きもあって、順調な入札となった（9月14日入札分は募入平均利回り2.332%、応募倍率2.24倍）。

9月の国内公募普通社債は、長期金利の動向に対する見極め気分が根強いことや一部電力会社が発行を延期したことから、2,100億円と前月に引き続き低調な発行となった（8月2,100億円）。一方、国内エクイティ市場での発行（9月払込み分、増資を除く）は、好業

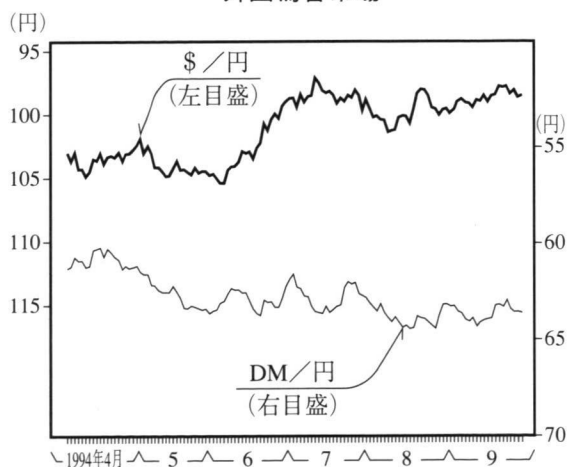
績の中堅・中小企業に加え一部大企業の大型起債もあり、4年6か月ぶりに4,000億円を突破した（8月3,280億円→9月4,360億円）。

3. 外国為替市場

9月の円の対米ドル直物相場（東京市場、終値）をみると、米国におけるインフレ懸念の強まり等を受けて、中旬までは堅調に推移した。もっとも、月末にかけては日米包括経済協議の合意成立に対する楽観的な見方が高まったことから反落し、結局98.59円で越月した（前月末99.57円）。円の対独マルク直物相場（東京市場、終値）は、月中を通じて概ね63円台で小動きに推移し、結局63.68円で越月した（前月末63.25円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は123.2億ドルと、前月（121.6億ドル）を上回った。

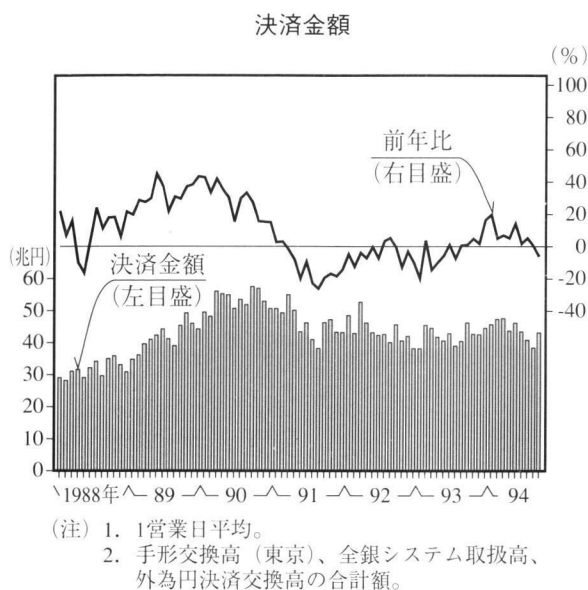
外国為替市場



4. 決 済

9月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を下

回った（前年比△19.4%）一方、全銀システム取扱高は前年同月を上回った（前年比+2.3%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を下回った（前年比△4.1%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については、移転登録（前年比+3.7%）は前年同月を上回った一方、振込口座振替（同△30.6%）は前年同月を大幅に下回った。



5. 資金需給、金融調節

9月の資金需給をみると、銀行券要因が1,132億円の余剰（前年同月3,375億円の余剰）となった一方、財政等要因は国債発行等から1兆6,358億円の不足（同8,217億円の不足）となった。こうしたことから、全体では1兆5,226億円の不足（同4,842億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行はF B・売出手形の買い戻し等により資金を供給した。

10月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因が月中受払同額程度（前

年同月6,905億円の不足）となる見通しである一方、財政等要因は国債償還や厚生年金、国民年金の定時払い等を中心に支払いが嵩むことから、3兆1,300億円程度の余剰（同2兆5,912億円の余剰）となる見通しであり、この結果、全体では3兆1,300億円程度の資金余剰（同1兆9,007億円の余剰）となるものと予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

8月のM₂+C D平残前年比伸び率は+2.0%（速報）と、前月比横這いとなった。通貨種類別にみると、C Dの伸び率が低下した一方、準通貨の伸び率が上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.6%（速報）と、前月に比べ0.2%ポイント上昇した。

9月の銀行券平残前年比は+7.2%と、前月（+5.0%）を上回る伸びを示した。

9月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+C D、都銀、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+2.1%と、前月比上昇した。また、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は△0.2%と、前月対比マイナス幅を0.1%ポイント縮小した。

7. 貸出・預金金利

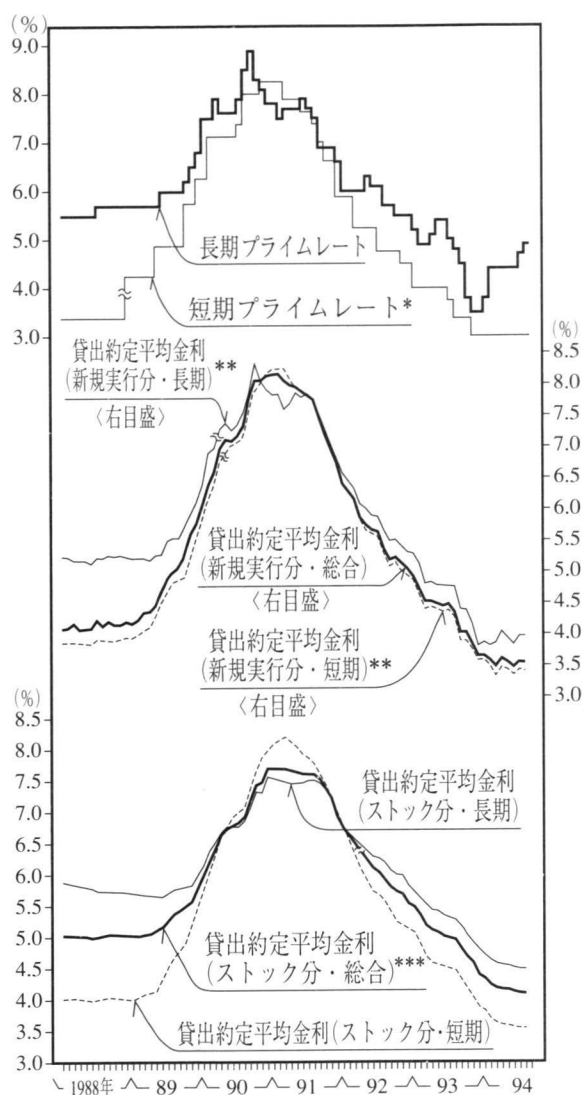
8月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、短期、長期ともに2か月ぶりに小幅の低下となったことから（短期：前月比△0.019%、長期：同△0.008%）、総合でも2か月ぶりに低下した（同△0.015%、総合：7月3.560%→8月3.545%）。

また、ストック分については、短期、長期、

当座貸越ともに引き続き低下傾向を持続し（短期：前月比 $\Delta 0.003\%$ 、長期：同 $\Delta 0.011\%$ 、当座貸越：同 $\Delta 0.000\%$ ）、総合では14か月連続で既往ボトムを更新した（総合：7月4.098% \rightarrow 8月4.093%）。

この間、8月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は前月比上昇した（7月1.965% \rightarrow 8月2.024%）。

貸出金利（全国銀行）



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)